
ポケモン不思議のダンジョン ~とある神童の物語~

アカザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン～とある神童の物語～

【Zコード】

Z3308BA

【作者名】

アカザ

【あらすじ】

この物語はオリジナルとゲームが混じっています。

特に主人公に関することなどが、あまりにも原作と違いますので注意。

時の探検隊をもとに書いています。

プロローグ

「出来たっ！」

研究所内にまだ幼い声がこだまする。

白衣を着てその言葉を発したのは、まだ十才位の男の子。
その子はまだ幼いといつに、監禁され、兵器開発を行わされた。

この子の才能は素晴らしい、今も核シェルターにこもり、兵器ではない何かを作っていたのだ。

・・・・・・・・

第3次世界大戦が核により、核シェルターにこもつたまま兵器開発をしていたこの子を残して人類が滅亡した今も。

この子に残されたのは、厳しい現実と、食料と、研究資料、そして工具と材料のみだった。

その子は好きだった携帯ゲームや工具をリュックに入れ背負うと、出来上がつ野球ボールくらいのたソレを手に持ち、ソレの中心のスイッチを押す。

「展開！」

ソレは突然光輝き男の子の真下に紫色の渦を作り上げ、男の子は渦の中へ消えていった。

異世界での出会い

異世界へのゲートをくぐった僕は、しばらくの間、亞空間を漂つて出口を探していた。

正直言つて、実験台の蚊やゴキブリはR-15指定になつて10才の僕にはちょっときつかったので、そんなことが自分に起きないよう願う。

そんな事を考えて漂つてゐるうちに、光り輝く出口を見つけた。

光り輝く出口をくぐつた途端に僕の思考は突然の浮遊感によつて一瞬止まる。

考えた通り、異世界にこれた。けどこれはヒドイじゃないか。いきなり空中だなんて。

不快な浮遊感が続く。下には砂浜が見える。落ちても死にはしないだろうが怖い。

諦めた瞬間、砂浜に鈍い音をだし僕は落とした。

「大丈夫か。生きているなら起きる」

頬をペシペシと叩かれ目を覚ます。

目の前には黄色い生き物がいる。たしかこの生き物は・・・ポケモン？たしかピカチュウというポケモンだ。昔のゲームを拾つて遊んでいた。

まさかこじはポケモンの世界だとでもいうのだらうか？

でもそんな事不思議ではない。どんなにありえないことでも可能性はゼロではない。

それにこじは空気が澄んでいて、平和そつだ。

「大丈夫？この砂浜で倒れていたんだよ。これは君のでしょ？」

そう言ってピカチュウは無表情でリュックと、野球ボールのような空間移動ゲート展開装置を差し出した。

「ありがとう」

と黙つて自分の様子がおかしいことに気づいた。一本足で立てない。

それだけじゃなくて自分の手を見ると茶色い毛が生えている。

よくよく考えるとピカチュウの大きさもおかしい。

「それにしてもおかしいね。どうしてそんなイーブイじや背負えないリュックなんか持つてるの？」

まさか・・・

「変なこと聞くけど僕が人間に見える？」

ピカチュウは無表情で驚きの言葉を発する。

「君はどう見てもイーブイだよ？」

· · ·
(汗)

「どうしたの？」

しばらく混乱したあとで、相変わらず無表情のままのピカチュウに、自分があのボルミタイのを使って異世界から来た人間だと告げた。

「へへ・・・その話を信じる信じない以前に、自己紹介しようよ。僕はボルテ。種族は見てのとおりピカチュウ。トレジャー・タウン最弱のポケモンだよ」

いくらなんでも最弱はいらないだろ？

「僕は・・・ディファと呼んで。本名はもう知らない。自分の過去を忘れてここで暮らすつもりで来たから」

ボルテは田の前のイーブイ、ディファの過去が気になつた。

ディファが自分の過去を消してここで暮らすと言つたとき、ディファの目に悲しみが見えた。

しかしあえて聞かないでおいつ。

「ところで、ボルテはなんでここに居たの？」

「自分への反省と、悔しさ紛らわすためのリラックス」

そう言つてボルテは首にかけていた物を外して僕に見せる。

それは何かのカケラのようだが、不思議な模様が描かれていた。

「これは？」

「遺跡のカケラ……僕はそう呼んでる。これは僕の宝物なんだ。ほら、ここに不思議な模様があるでしょ？これを見て、リラックスするんだ。僕は探検隊になつてこの模様の謎を解くのが夢なんだ」

「探検隊つて？」

そう言つた途端に誰かがボルテにすごい勢いでぶつかつた。

「おつと『メン』よ

「これは貰つていくぜ！」

そう言つて遺跡のカケラを奪つて逃げていく。あれはドガースとズバットだ。

「はあ……」

ボルテはため息をついて、右手の人差し指と親指を立てて銃の形にすると、

「リロード……ショックガン！」

指先から電撃を二回放つた。

それは見事にドガースとズバットに当たった。

「探検隊って言うのはこうやって、おたずねものを捕まえたり、困った人を助けたり、探検したりするポケモン達のことだよ」

ボルテ（前書き）

短いです・・・スイマセン

ボルテ

「ボルテ、さつきの技はなに?」

「僕が最弱な理由。それは溜めた電気を外に放つことができない。そして、相手に直接触れて電気を流そうとしても、素早さが足りない。

だけど電気ショック並みの電気は放つことができた。だけど電気ショックなんてたかがしれてる。

だから電気ショックだけ練習して、電気を体の一部に流し込んで遠くに放つ。それがショックガン。

そして、相手をマヒさせる効果も得た。けど・・・やはり威力は無かった。

だから仲間がいないサポート役だけが戦つたてダメなんだ

ピクピクと痙攣しているズバットから遺跡のカケラを取り戻す。

「だから、ブクリンのギルドの前で、探検隊に弟子入りしようとしても、いつもこんな自分が探検隊になつていいいのか迷つて、逃げて、ここに来るんだ」

なるほど・・・なら

「じゃあ僕が仲間になつてあげる!」

「いいのか?それにお前は戦えるか?」

勿論戦い方なんて知らない。でも

「戦い方は教えてよ。それに僕はこの世界はで住むといふも無ければこの世界の知識もない。

でも僕は頭いいんだよ？それにサポート役だけじゃ、力は出し切れ
ないし、自分自身が情けないなら僕と一緒にギルドへ行こう？」

幼い純粹な気持ち。

それがボルテには伝わった。

「ありがと」

ボルテが笑つて言った。

ボルで自身が久々に笑つたと感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3308ba/>

ポケモン不思議のダンジョン～とある神童の物語～

2012年1月8日19時48分発行